

特集

震災に備える



日頃からの飼い主の震災準備が、万が一の場合にはペットの命を守ることに繋がります。特に震災は一度に多くの方が被災するので、動物のことはお座なりになりがちです。こんな時に、ペットを守ってあげるのは飼い主です。

必ず一緒に避難する

災害によっては事前に予測がつき、また終息の見通しがつくものもありますが、予測が難しいのは人災と地震です。中でも、場合によっては壊滅的な規模で被害が広範囲に及ぶのが地震です。3月11日、東北地方太平洋沖が震源地のマグニチュード9.0という日本観測史上最大の地震が東日本を直撃しました。この未曾有の震災で15,000人余りの方々が亡くなり、9,400人余りの方々が未だ行方不明、116,000人余りの方々が避難所での生活を余儀なくされています。(5月15日現在)また、福島の第一原発は未だに事故の收拾がつかず、混乱が続いている。いつ起こるか分からぬ災害。日頃からの備えや心の準備が重要になってきます。まず、発災時にはテレビやラジオなどで情報を入手し、状況を確認します。家族や動物の無事を確認します。そして、すぐに避難の準備にかかり、動物同伴で避難することを考えます。災害に備え、避難時に使うキャリーバッグや犬のリードは、いつも身近な所に置いておきましょう。発災時、室内であってもまずはリードをつければ、犬がパニック状態になってしまった場合でもコントロールしやすくなります。多種多頭の動物を飼育している方は、日頃から対策を別に考える必要があります。

避難用袋の用意

いつ起こるか分からぬ災害に備え、避難に必要なものをまとめて、いつでも持ち出せるようにしましょう。特に服用中の薬や病気に関わるものは必ず持つて逃げられるようにしましょう。

※準備しておくと良いもの

- 1.少なくとも3日分の水、食料(処方食などは必須)
- 2.キャリーバッグ、リード
- 3.家族と写った動物の写真(捜索する際に有効)
- 4.動物の健康管理ノート
- 5.毛布やバスタオル、ビニール袋(食器代わりにもまる使えます)、ゴミ袋、猫のトイレ砂(容器はゴミ袋を利用)、ペットシ

災害時の混乱の中では、動物たちと離ればなれになってしまうケースもあります。迷子になった動物たちを探す時や保護した時に必要なのが動物たちの情報です。そのために、首輪、鑑札、迷子札、マイクロチップの装着をしましょう。災害時に備えるには日頃から室内でも名札や鑑札のついた首輪は外さないようにしましょう。地域行政の防災計画が立てられているとはいっても、動物との避難について言及しているものはほとんどありません。実際に災害が起きた際、動物救援本部が設置されるまでにどのくらいの時間がかかるのかも分かりません。避難場所で一人当りの使用可能な面積は限られています。混乱を極めている状況で、避難所に動物を同行することは困難な状況でしょうが、必ず一緒に避難し、出来れば自分の力で動物の避難スペースと安全を確保、何日かの間は救援を待てるだけの準備をしておくことが求められます。2000年の有珠山の噴火の際は、避難地域の住民は48日間も立ち入りが禁止され、一緒に避難しなかった多くの犬猫たちが餓死や衰弱死しました。動物も大切な家族の一員です。避難場所で迷惑にならないよう、日頃から社会性を身につけておき、災害に遭った際は一緒に避難することが重要です。

一つ、新聞紙、手入れ用品など

動物の健康管理ノートは日頃から作成しておくと、飼い主に不測の事態が起きた際にも大変有効です。名前、性別、生年月日、避妊去勢済みか否か、マイクロチップの有無、病歴、現病歴、現在服用している薬、合わない薬、処方されている食物、かかりつけの病院名と連絡先、飼育環境、注意事項(咬傷事故歴や理由など)、性格などを書いておきます。また、狂犬病予防接種、混合ワクチン接種の証明書も添付、飼い主の住所、氏名、連絡先、携帯電話番号を記載し、ペットの写真を貼っておくと万全です。

マイクロチップの有効性

迷子になった時に一番有効なのがマイクロチップ。まだ日本ではありませんが、近い将来には全国的に普及することが予測されている最も迅速・確実に個体識別ができる方法で、環境省や獣医師会、動物愛護団体などで積極的にすすめているところです。大きさは長さ10数ミリ、直径約2ミリのカプセル状のチップで、動物の頸部の背側皮下に注入します。

(写真1)挿入後、このチップの中の情報をデータ管理機関(AIPO)に登録しますが、挿入している動物が迷子になった時に、専用のリーダーで番号を読み取り

(写真2)、データ管理機関(AIPO)に問い合わせると、動物や飼い主の情報を入手することができます。マイクロチップの注入および登録は動物病院で簡単に行うことができます。注入は通常動物に皮下注射を施すのと同じで、痛みもほとんどありません。

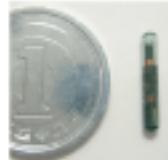


写真1



写真2

犬・猫の具体的な避難法

犬 《大型犬》災害発生時、一番困るのが抱き上げられないということです。避難経路にガレキやガラス片が散乱している場合、火災で地面が熱くなっている場合、怪我をしていて歩けない場合、そんな時のためにその子にあった靴を用意して、普段から慣らしておきます。また、大きさ体重によっては、大型犬を抱く為の補助用品もあります。注意しなければならないのが、発災時のパニック状態。普段は大人しい子でも、恐怖のあまり人を攻撃することもあります。リードでコントロールするようにして下さい。

《小型犬》避難の際は、必ずキャリーバッグに入れるようにしましょう。

《外飼育》人の避難の際、忘れられがちなのが外で繁殖して飼われている子たち。増水の際には、繁殖されたままで置いて行かれると、溺れる可能性もあるのです。災害時には必ず同行避難するようにしましょう。

猫 大変なのは猫の避難です。しかも猫は複数飼育の家庭が多く、怯えて隠れてしまったら、呼んでも返事をしない、出てこない、捕まえようとすると暴れてしまうことが多いです。捕まえる際には、洗濯ネットが便利です。キャリーバッグに移動できたなら、そのまま避難場所にも連れて行けます。日頃からキャリーバッグを猫の居場所に設置しておいて、居心地良く作っておけば、寝床や隠れ場所にもなり、いざ猫を連れて避難という場合に手間取らなさそうです。また、猫もパニック状態になると、噛みついたり引っ搔いたりしますから、人も猫も怪我をしないように注意が必要です。また、どこか室内に落ち着くまでは、キャリーバッグの扉を開けるのは絶対にやめましょう。屋外で一度逃げ出してしまったら、探し出すのは困難を極めます。避難所で世話をする際にも、充分注意し、逃げ出さないようにしましょう。

【北海道獣医師協会手引きより】

- 1.飼主は小動物と共に避難することが原則である。
- 2.やむを得ず小動物と共に避難できなかった場合は、個体についての情報、避難時の動物の状況を最寄りの救護動物保護センター、地方行政の動物担当部署、警察などに届ける。
- 3.小動物を救護動物保護センター、救護動物治療センター、または飼主と離れた別の場所で飼養する必要が生じた場合は、それぞれの管理者の指導に従う。
- 4.狂犬病予防注射、その他の伝染病予防注射の証明書など疾病予防管理に関わる書類を避難先に携行する。
- 5.災害発生により死亡した小動物は、公衆衛生上放置せず速やかに処理(火葬または埋葬)する事を原則とする。その際の処理計画、処理施設については行政の指導に従うこととする。動物の飼育者は、動

物との暮らしを好まないまたは出来ない住民も居ることを、第一に認識しなければならない。非常災害時に避難生活を余儀なくされる場合に、これらの住民と他の動物飼育者との共同生活が円滑に行くように、動物の本能、習性、疾病などを理解するとともに、平時から動物に最小限のしつけと社会への協調性を学習させ、合わせて各種伝染病の予防処置と必要な繁殖の防止策を講じておく必要がある。災害発生に際しては、必ず動物と共に避難をし、自宅への留置と繁殖からの解放はやむを得ない場合以外行わない。動物との避難に備え、移動用ゲージ、リード、非常携行食並びに飲料水などを準備すると共に、個体識別が可能な工夫(首輪・迷子札・マイクロチップなどで)を施しておくことが必要である。